



給食たより

平成 27 度 1 月号

丹波山村学校給食センター

栄養教諭：小池ゆき

全国学校給食週間(1月24日~30日)

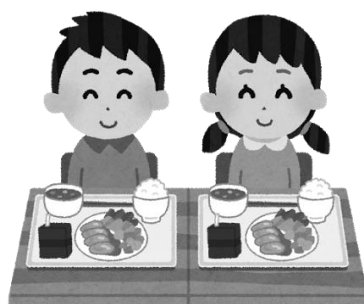
新しい年を迎え、3学期もスタートしました。まだまだ寒さの厳しい1月、温かいものを食べ、体の中から温めることを心掛けましょう。3学期は学年のまとめとなる学期ですが、風邪をひくなど体調を崩しやすい時期です。栄養と休養をしっかりと取り、体に気を付けて元気に3学期を過ごしましょう！



中学3年生・小学6年生の希望献立

中学3年生・小学6年生、それぞれの学校生活も、残り3ヶ月になりました。給食センターでは、残り少ない給食の時間が少しでも楽しいものになるよう、さん・さん・さんが考えた献立を、給食に取り入れることにしました。

4人は丹波小学校・中学校で学んだこと(給食の時間や家庭科の授業など)を生かして、一食分の献立を考えてくれました。小学6年生の考えた献立は2月・中学3年生の考えた献立は3月に実施予定です。みんながどんな献立を考えてくれたのか楽しみにしていてください。また、希望献立に入れられなかった4人が大好きなメニューは、1月から順次登場しています。こちらもお楽しみに。



※献立予定表にある、★印は中学3年生の好きなメニュー、☆印は小学6年生の好きなメニューです。



突然ですが、みなさんは、日本の学校給食がどのくらい前にはじまったか知っていますか？実は、今から126年前の明治22年にはじまりました。当時は、貧しくて学校に行けなかったり、お弁当をもってこることができなかったりする子どもたちがたくさんいました。そのため、どんな子どもたちでも学校に通えるようにと、山形県の鶴岡市のお寺の中に「忠愛小学校」という学校ができました。その小学校で日本ではじめての給食が出されるようになったのです。



当時の献立って、どんなもの？
学校給食がはじまった、



学校給食のはじまった

当時の献立は、

おにぎり・焼き魚・煮物

(煮びたし)・漬物

などでした。



忠愛小学校をつくるためにかかわったお寺のお坊さんたちが、町を歩きお米や野菜を集めたり、浄財(寄付金)から食材を購入して、給食を提供していたそうです。

時代が変わっても、みなさんのためにおいしいものを提供したいという思いは変わりません。現在では、学校給食は『生涯に渡って健康に過ごすための食に関する知識やマナーなどを身に付ける』という役割を担っています。



第36回(平成23年度)「ごはん・お米とわたし」作文・図画コンクールで、内閣総理大臣賞を受賞した作文作品を紹介합니다。読んでみてくださいね。

♪ 学校給食週間のメニュー ♪

25日 (月)

山梨県の特産品

ルウに山梨県を代表する豚肉『甲州富士桜ポーク』を、ご飯に市川三郷町の特産品『大塚人參』を炊き込んだカレーライス。北杜市(旧:明野町)の特産品『切干大根』を使ったサラダ。甲斐市(旧:敷島町)の特産品『梅ジャム』を使ったゼリーをつくります。

27日 (水)

明治22年の給食

学校給食がはじまった当時の献立は、おにぎり・焼き魚 漬け物(煮物や煮浸し)などでした。今回は、『豚汁』と『牛乳』を付けたしました。

22日 (金)

青森県の特産品

☆ 郷土料理 ☆
八戸市を中心とした県南地方で食べられている『せんべい汁』。
☆ 特産品 ☆
『鯖』・『いか』・『りんご』

26日 (火)

東京都の特産品

☆ 郷土料理 ☆
深川地域(現在の東京都江東区) 一帯が海だったころ、あさがたくさん獲れていたことから、『深川めし』と名付けられたごはん。
☆ 特産品 (江戸東京野菜) ☆
『大根』・『小松菜』

28日 (木)

昭和25年の給食

アメリカ合衆国からの小麦粉を使い、8大都市の小学生児童対象の完全給食がおこなわれるようになりました。今回は、その頃の給食を現代版に少しアレンジしました。

「ありがたいねえ。」

三日目、凍りつきそうになる両足をカタカタ震わせながら考えた。

(そうだ、あの日も、私はごはんを残していたんだ。しかも、私達の学年の残飯量は、毎日、目立っていた。)

あちらこちらから、せきをする音が聞こえ、避難所として用意された教室に響いた。そして、小さい子が泣き出す。

「おなかへったよお。」
その子達のお母さんが、二人をだっこして、教室の外へ出ていく。

「すみません。」
小さな声だった。私は心の中で返事をする。

(誰も迷惑なんて思っていないよ。)

丸二日、食べ物をおにぎりにしていない。突然、恥ずかしいという思いが押し寄せてきた。自分の意志で、食べ物をそまつにしてきたことに対する恥ずかしさ。

「え、本当に。やったあ、やったあ。」

「もらえるんだって、おにぎり。」
(うわあ、三日ぶりのごはんだ。)

配給されたおにぎりを両手を器にして、半分腰を曲げて受け取った。いや、頂いた。でも、あれほど待ちのぞんだおにぎりなのに、食べるのがもったいないように感じられた。友達と、こんな会話をしながら、寒さや恐怖とたたかっていたのだ。

「食べ物食べられるようになったら、最初に何食べたい。」
私達の答えは、三人とも、おにぎりだった。

この時、私の耳に入ってきた言葉、
「ありがたいねえ。」

近くで窓の外をじいっと見つめながらおにぎりを食べていたおばあさんの言葉だった。この言葉によって、手の中のおにぎりが、よりいっそう輝いて見えた。感謝の心が、つやつやと光っている。友達と顔を見合わせ、どちらからともなく、口にした言葉。
「食べるよ、食べるよ、せえのっ。」
口にしたおにぎりの味は、たぶん、一生忘れないと思う。

「一つ夢、かなったっちゃあ、私達。」

お米の味をかみしめながら、自衛隊の人に手を合わせ、何度も何度も(ありがたい)を繰り返した。

今、思う。あの日のおにぎり、あれは希望だった。あのおにぎりがあった、私がある。おなかへった、と泣いていた二人の命がある。寒さとたたかっていたお年寄りの方々の命がある。あれは、千二百の尊い命を救った、まさに命のおにぎりだったと思う。多くの手と、その思いが実らせるお米だからこそ、私達に希望を与えてくれ、明日を感じさせてくれたのだと思う。

支え、支えられるための力を生みだしてくれたお米に感謝したい。
(ありがたいねえ。)